



KWACHA

NO.5

Kwacha (クワチャ) はチェワ語で「夜明け」を意味し、オンドリの声からきたといわれています。

第7回通常総会開催される

1989年5月13日(土)東京都渋谷区のホテルにおいて日本マラウイ協会第7回通常総会が開催されました。(出席19名、委任状58名)

開会にあたりト部敏男会長より、アフリカに対する情熱とともに、当会がマラウイと日本の架け橋になるよう切望する旨挨拶がありました。議事の概要は次のとおりです。

- 第1号議案、1988年度事業報告、決算報告・・・原案どおり承認
- 第2号議案、1989年度事業計画、収支予算・・・原案どおり承認
- 第3号議案、役員改選について・・・事務局一任

なお、当日の珍しい出席者をご紹介します。KWACHA第4号にて「まるごとマラウイ」というタイトルで、マラウイからの民間留学生ジョージ・カベレメラ氏(リロングウェ畜産局勤務、88年3月迄2年半日本滞在)を紹介しましたが、彼のホームステイ先であった埼玉県鶴ヶ島町の矢野氏ご夫妻。彼の滞在中の思い出とともに、マラウイへ彼を訪ねて行きたいとお話されていました。

—1989年度の事業計画—

1. 広報活動：機関紙「KWACHA」発行、新規会員の入会勧誘、懇親会開催
2. 資料収集：マラウイ定期刊行物の購読継続、参考文献の収集
3. 出版刊行：チェワ語辞典改訂版、比較生活文化辞典、会員住所録、マラウイ紹介ビデオ編集
4. その他：マラウイからの留学生、研修生への側面支援、青年海外協力協会への協力

◇平成元年度OG・OB会◇

1989年9月2日(土)東京都渋谷区広尾の青年海外協力隊事務局ホールにて、マラウイ国派遣協力隊員OG・OB懇親会が開催されました。

昭和46年第1次隊のマラウイ第1期派遣隊員より帰国したばかりの昭和62年1次隊まで、北は仙台、南は熊本からかけつけた計54名(含家族)でにぎやかに行なわれました。

小野修司前JICA事務所の司会により、歴代駐在員を代表して4月に帰国された奈良輪陸美前同事務所長の挨拶で開会。懇親会にかかせなくなったシマ(現地食)が今年も一番人気。有志の調理によりテーブルに並ぶと、あつと言う間に、、、

また、1964年7月6日の独立以来25周年を迎えたマラウイ国。現地JICA事務所より届いた、ブランタイヤ市カムズスタジアムでの言己念式典の様相を録画したVTRが出席者の食事の手を休めさせました。

隊次ごとの参加者紹介ののち、沢山のマラウイグッズ(大統領のバッチャネクタイ等)を景品とした即席マラウイクイズで盛りあがったところで、来年の再会を約しつつ散会となりました。

来年もまたたくさんの参加者がありますよう!!

90年の懇親会に関して、時期や場所、内容等にご意見、ご希望を事務局までご遠慮なくお寄せ下さい。



去る2月25日大葬の礼に参列した、マラウイ国パシャネ無任所大臣、ハンジャハンジャ儀典官を招き、懇談の時を持ちました。

マラウイニュースより

1989年

- 3月6日 大雨のため増水していたシレ川下流域で洪水が発生。サリマで家屋の流失等被災者は100名を越え、コタコタでは道路、橋の崩壊があった。1956年以来最悪の洪水である。
- 3月10日 午前4時、11日深夜にマラウイ中部を中心に地震が発生少なくとも3名(デッサ、サリマ)が死亡。負傷者は60名にのぼった。
- 3月31日 マラウイ独立以来初めての英国首相としてサッチャー首相が訪問。2泊3日の日程でチョロの紅茶畑の視察、バンダ大統領との会談を行った。
- 5月4日 ローマ法王ヨハネ・パウロ2世がアフリカ4カ国訪問の最後にマラウイを訪問した。
- 7月6日 独立25周年式典がブランタイヤのカムズスタジアムで行われ、日本より特派大使として前厚生大臣・衆議院議員増岡氏が式典に参列した。
- 7月28日 ブランタイヤ・チョーク会社のオーナーは昨年11月よりカンジェザにおいてチョークの生産を開始しているが、鉛筆の生産についても、既に南部アフリカ諸国の鉛筆工場の視察などを行い準備をすすめている旨発表した。
- 8月15日 UNHCR社会福祉担当官は、マラウイ国内のモザンビーク難民の社会・経済的、福祉の向上に対する責任を再確認すると述べた。現在約50万人の難民がキャンプ内での生活向上のため自律手段となる技術が必要としているとのことである。
- 8月26日 ESCOMはNCHISI地区にアフリカ基金開発計画により電気が供給されることが決り、これによりマラウイの24地区全部に電気が供給されることになったと発表。
- 9月1日 バス会社UTMはリロングウェよりルサカ・ハラレへ国際急行バスを9月末より運行する旨発表した。所要時間はそれぞれ13・24時間。
- 9月12日 MCHINJI、15日SALIMAの州病院の開設式典がバンダ大統領を迎え執り行われた。
- 10月10日 1129名中約500名のモザンビーク難民がリコマ島よりカタベイ地区に移動し、新しく北部地区初の難民キャンプの開設となった。
- 10月30日 バンダ大統領はブランタイヤのサンジェカパレスにおいて新しい齋木日本大使より信任状を受取り、マラウイの開発努力への日本の援助続行に対し日本政府への謝辞を述べた。
(注) 9/12在ケニア大使館に替わり、在ザンビア大使館がマラウイ兼轄を開始しました。
- 11月27日 チマンゴ大蔵大臣は、マラウイ、米国両国政府はマラウイの米国への債務総額\$4,040万(56億円)にのぼる経済借款を無償にすることに合意し、調印したと発表。

マラウイの4年間

小野 修司

昭和58年に国際協力事業団へ入団後青年海外協力隊事業に携わり、つい先日南部アフリカの小国マラウイでの4年弱にわたる駐在を終え帰国した。

無事帰国できたことを素直に喜ぶ反面、現地で病気や事故のため天逝した協力隊員たちの在りし日の姿を思い出すと辛い想いが蘇る。

アフリカは常に、灼熱の暗黒大陸として描かれる傾向が強く、マスメディアも好んで飢饉に下腹部を膨らませた子供の目に集まるハエの多さを競って報道した時があった。

しかしその映像は、お茶の間の小市民的な幸福感の裏返しで、遠く離れた他の人々に対する憫れみの情をかきたてるに過ぎないし、また「貧しさの中にも子供達の無垢の笑いが救いだっただ」という見方も短い期間滞在した旅行者の表層的な視点でしかないように思えてならない。

過去の奴隷貿易、植民地時代に被った搾取の歴史の中で彼等に残されていたのは、全てを運命として受けとめ諦めて笑うことだけだったような気がする。無垢の笑いは悠久の歴史の流れに棹さす彼らの知恵であったのだ。

マラウイでは、風土病であるマラリヤ、住血吸虫に加え種々の感染症が蔓延している。助産婦隊員が配属された僻地の病院を訪問した際に聞いた、子を亡くした母親の涙声は、いまだ耳に残っている。乳幼児の死亡率の低下は、どの途上国も掲げる目標である。保健医療は、インフラの整備とともに途上国にとって焦眉の急である。

例えば村落で臨月を迎えた母親がいるとする。ある日陣痛が始まっても、病院は遠く移動手段も

無く、近くの祈祷師に頼み自然分娩したとする。産湯を使うにも近くの川の水で、肌着もシーツとおしめ兼用の木綿布が二枚程。石けんなどは大の男が一日汗して働いても高価で買えない。日頃の栄養状態が悪い母胎の母乳は薄い。粉ミルクのような援助物資がもらえたら……。しかしこれは夢みたいなものだ。なんと一歳の誕生日を迎えたとしても、雨期になると隙間だらけの家には蚊が容赦無く乱舞し乳飲み子を刺し、そしてマラリヤの感染。乳幼児の問題だけをとりあげても、必要な措置は山積みされたままである。村落へ診療所の設置、薬剤の入手、医療従事者の育成、母親の教育、インフラの望備、マラリヤ蚊の撲滅等々。一方死亡率が低下したとして、出生率が高いままであったら貧しい中で人口を増やすだけとなる。その食料をどこから入手するのか。近代的な西欧社会に倣った開発をしてもそれは意味を成さない場合がある。現地に暮す人々の物の考え方、生活のベースにそぐわないシステムは長続きしないからだ。たとえ政府開発援助予算を増やしてもその前提となる相手側（援助される側）の社会、経済、政治、文化についての十分な理解と長期的視野が欠落していたら、増えた数字は無意味である。それを意義あるものとするのは、途上国の人々への同情ではなくて共感である。それこそ現場で援助業務に携わる我々が忘れてはならないことなのである。

「持てる者」、「持たざる者」の立場は物質面の豊かさだけで条件づけるわけにはいかない。今回マラウイでの生活を終えて痛感したことがある。それは、この国における相互扶助の強さである。青空市場で買い物の途中、子供に小銭をねだられることは珍しくなかった。その都度、適当な言

い訳をしたり、無言で通り過ぎたりしていた。ある日、少年が「マスター、腹が減って死にそうだ。お金をくれ、小銭でいいから」とすり寄ってきた。いつもの調子で私は「俺も金がなくて困っているんだ」と答えると、少年は真顔で「本当に困っているのか」と問い質した。今更違うとも言えずにいと、彼は50タンバラ（26円程）差し出した。これには驚いてしまった。もちろん受取りはしなかったが、その日一日幸福な気分でご過ごせた。それ以来、随分と社会の中で持ちつ持たれつの関係が浸透していることに気がつくようになった。アフリカ生まれの娘を筆頭に私たち家族はこうした現地の人々から感謝し尽せないほどの親切を受けた。またいつか輝きの国を再訪できることを夢見ている、今日この頃である。（おのしゅうじ）

現在青年海外協力隊事務局派遣第二課勤務

キャッサバ シマ

の粉 入荷しました。

協力隊の一時帰国隊員よりおみやげとして頂きました。

ご希望の方は事務局までご連絡を
もちろん 数量に制限あります。

私が見たマラウイの病院

平成元年12月2日、日本青年館で（社）協力隊を育てる会主催の協力隊現地報告会が開かれました。その中でマラウイ協力隊OGの太田晴子さんが「私が見たマラウイの病院」と題して、昭和62年7月からの2年間にわたるマラウイ国立総合病院（カムズセントラルホスピタル）での栄養士としての体験を紹介しました。以下はその抜粋です。

統計によると、マラウイは世界で6番目に貧しいLLDCです。現在人口は700万人と言われていますが、その他にモザンビークからの難民が約70万人いると言われてます。国連機関による食料の配布も行なわれています。乳幼児死亡率が高く平均余命は45歳と言われてますが戸籍がはっきりしないので正確な数字はわかりません。栄養失調も多く4歳までの死亡原因の第3番目となっています。ちなみに、1番はしか、2番肺炎、4番マラリア、5番貧血、6番下痢性疾患です。男性の長髪も女性のズボン禁止も古い古い隊員の頃と変わっていません。

勤務先の病院の本来のベッド数は456なのですが、実際のベッド数は579で、さらに床の上に寝ている患者もいて、合計の入院患者数は1000人程度に達しています。看護婦の不足もあり、患者の他に多くの付き添いの人が寝泊まりしています。国立病院では食事はただなので、患者や付き添いの人はもちろん、食事時にはまわりの人も食べに来ているようです。

病院のキッチン思ったよもきちんとしていて、働いている人も白衣を着ているのですが（ハダシの人もいますが）、床に落ちた食べ物をそのま

ま使うとか手を洗わないといったことに気がついたので、調理の前に石鹸で手を洗うように教えたのですが、石鹸を置くたびに誰かが持って帰ってしまい、結局実現しませんでした。こうした小さいことも、習慣とか貧しさの克服等、他の面での改善と一緒に行なわないとうまくいかないと痛感しました。

栄養士の仕事として、食事療法の指導も行ないました。マラウイでは栄養失調の人がいる一方、肥満の人も少なくありません。一般的傾向として貧しい人は痩せており、金持ちは太っています。肥満の人達にサンプルメニューを作ったりして栄養指導をしても、なかなか守って貰えず、体重はなかなか減りませんでした。肥満に対する問題意識が低いことも一因だと思います。

就任当初は病棟とキッチン間のコミュニケーションが悪く、食事の配給のたびに看護婦から伝えられる患者数もいい加減で過大だったので、患者数を自分で病棟に行って全部チェックするようにしたところ、最初は看護婦から反発を受け、不当な文句も言われましたが、しつこくやっているうちに認められるようになり、看護婦から相談を受けるようになりました。看護婦との対立では、我々の共通の目的は患者によりよい条件を与える事だという事を強調して解決するようにしました。

以上が抜粋です。太田さんのお話、歌（栄養指導の為にチェワ語の歌）、スライドで十余年前とあまり変わっていないマラウイの現状を垣間見る事ができました。古いOG・OBには、とすれば楽しい記憶だけが残りがちですが、私は講演を聞いて、毎日毎日なぜか腹を立てて仕事をしていた自分を思い出しました。（多分マラウイが自分の希

望と違うことに腹を立てていたのだと思います。）途上国と言ってもNIESをはじめとする文字どおり急速な発展の途上にある国と、発展途上にはあるにしても、少なくとも物質文明の観点からすると発展がスローなマラウイのような国とでは全然様子が違い、またその差は拡大の傾向にあると思います。「発展」がよいことと決まったわけではありませんが、多くの日本人にとって未だに暗黒大陸であるマラウイにからんで何かしてみたいものだという気持ちがまたまたしてきました。

（日本マラウイ協会レポーター）

・・・編集後記・・・

ようやく第5号をお届けします。前回から約1年半過ぎてしまいました。お許し下さい。

今後はもっと定期的に発行致したいと思っておりますが、皆様の助けを必要としています。

毎月第3水曜日夜7時頃より、主に広尾の協力隊事務局にて例会、各種作業を行なっていますがボランティア不足により、活動計画を実行するには力不足の状態です。ぜひとも、まず例会において預けますようご協力をお願いします。

日本マラウイ協会機関誌
「Kwacha」(クワチャ) 第5号
発行 日本マラウイ協会
〒106東京都港区麻布5-10-24
第2佐野ビル601
☎03-446-3574
1990年1月31日 発行